

師から弟子へと受け継いできた、文化を愛する心

おだわらライブラリー通信第四号では、平成27年度に第80回となる記念展を開催した西相美術協会の歩みについて、前会長を務められた齊藤四郎さんのお話と、かつて小田原城址公園で「小田原薪能(たきぎのう)」を主催されていた小田原謡曲連合会について、副会長の中津川悦子さんにお話を伺いました。先生から生徒、師匠から弟子と、世代を超えて受継がれてきた「文化を愛する心」が、おふたりのお話から感じ取ることができました。

好きだから描いていた。それが今も続いています。
齊藤四郎さん(西相美術協会前会長)



昭和16年に小学校1年で、12月に戦争がはじまり、戦争が終わったのが小学校5年。戦中、戦後と、何もないところで生活していました。中学校になって絵画部に入りました。が、デッサンに使う石膏像もなく、先生と一緒に、東海道線で東京まで買いに行き、抱えて帰って来たことを覚えていません。ただ好きだから、絵を描いていました。油絵を描きたかったのですが、道具が高くて買えない。就職して、二回目の給料で絵を描く道具を買いました。絵画教室もなく、独学で、本を買って勉強して、1人だけで描いていました。

描くと、発表したくなりま
す。かなり絵が溜まり、な
んとか個展を開きたい。小
田原にもツノダ画廊が出来
たばかりでした。会場を予
約したはいいけど、それまで1人で描いて
いたので、いい絵なのかどうか、小田原高校の
絵の先生に相談に行きました。25枚くらい
の絵のうち、みんなハネられて、残ったのは
たった7枚だった。それからもう夢中で描き
ました。それがよかったのだと思います。
それから毎日絵を描かないと落ち着かない
です。描きかけの絵がいつもアトリエのイー
ゼルに置いてあって、仕事に行く前も気にな
り、帰宅するとすぐ描いて。先生は、個展の
初日に見に来てくれまして、「まあ、いいだ
ろう」と言っていただけでした。

それから一年半に1回くらいペースで個展
をやりました。個展を初めてやった年に、市
展と西相展にも初めて出品しました。市展で
は佳作を、西相展のほうは市議会議長賞を
いただきました。審査員の柏木房太郎さんか
ら「齊藤くん、君も現展に出さないか」と誘わ
れて、すぐ会友推挙になりました。その後、
西相美術協会や現展の会員にもなったり、会
員賞をいただいたり。市展でも運営委員、審
査員。現展でも運営委員をやりました。
小田原市には、作品を買い上げて頂きました
。市民会館の中に80号の絵が飾ってあり

ます。あの絵は、黄色い色を使って描いた第
1作なんです。私は最初は筆だけで書いてい
ましたが、ペンディングナイフにしたり、色
を変えたり。変えたときの第1作は、意欲的
なのか、どれも気に入っています。
市役所の秘書室に10号の絵がありますが、
これも寄付です。他には、高校の同級生が病
院職員になっていまして、「お前の絵は明る
くて病院むきだ」と言われ、100号と12
0号を寄付しました。今でも架けられています
。私の代表作のひとつと思っています。



小田原市立病院の廊下に飾られている
齊藤さんの寄贈作品『船だまり』

いた委員や役員を降りました。何もやらない
わけではなくて、いま、妻とふたりで二人展
の準備をしています。妻が自詠の短歌を書い
した作品と、私の絵の二人展。これまでの個展
と趣を変え、ペンでの点描と、これまでの油絵
で描いた同じ場所、同じ風景を並べてみよう
と思っています。「なるほど、齊藤という人
間はこういう視点で描くんだな」と、見てい
ただくと分かります。面白いなと思うと飛び
ついて、適当には終わらせない。気が付くと
のめりこんじゃう。とことんやらないと気が
すまない。そんな人間です。

小田原のまちを歩いてみると、急に更地に
なっていたり、ながあつたか思い出せない
ところが、ところどころにあつて、なにかを
残しておかなければ、という気になって『小
田原百景』を描きました。酒匂川をよく歩
くんですが、どんどん変わっていくんですね。
それで『酒匂川の三十六景』。風景画集です
が、小さい本にして地図をつけて、どこを描
いたか分かるようにしました。
小田原の木工所が新聞記事に出ていて、玩具
を作る木工所の鉋(かんな)や轆轤(ろくろ)な
どの道具、これもどんどん変わって行つてし
まう。とても面白いので、「道具を描こう」
と、『匠たちの道具』を1冊作りました。今
までに4冊。まだやりたいことはあるんです
が、年を取ってしまったときに、残りの人生を好
きなように過ごしたいと思ひ、今までやって

西相美術協会、そして「西相展」は、昭和6
年の第1回展から始まりました。その頃には
いるんなグループがあつて、お互いに集ま
り、昭和26年から「西相美術協会」となり
ました。
昭和6年の第1回、展覧会をやるうと集ま
たのが7人、井上三綱、原精一、柏木房太
郎、牧正雄、山下大五郎、内藤徳、柏木康
兵。まだ中央で活躍する前、20代、30代
前半で、みんな若手の作家でした。
井上三綱さんは当時27歳、酒匂村の小学校
の先生で、後に国画会に所属し、海外での活
躍も多い方です。先日、作品を寄贈され、松
永記念館で市主催の作品展がありました。原
精一さんは、藤沢のお寺の長男で、女子美術
大学の教授もやりました。裸婦の専門です。
柏木房太郎さんは、柏木隆一さん(市内在
住・画家)のお父さんで、もともと薦職でし
たが、井上三綱さんに師事して、その後は現
展の運営委員をやられました。山下大五郎さ
ん。安曇野の風景が有名。柏木房太郎さん
は、山下さんの絵に惚れこんで、柏木さんも
安曇野の風景を描いています。内藤徳さんは
二宮出身で、東京美術学校を卒業。彫刻の牧
雅雄さんは小田原の彫刻家で、院展の同人。
柏木康兵さんは、牧さんのお弟子さんです。
皆さん、その後、中央で活躍することになる
若手作家たちです。
第1回のときに、招待作家が3人、特別陳列
しています。まず三綱さんと同郷の坂本繁二
郎。この方は梅原龍三郎・安井曾太郎と並ぶ
大正末期から昭和にかけての洋画界の巨匠で
す。昭和6年頃は作家として脂の乗った時期

でした。その後、文化勲章をもらっています。井上三綱さんは、同郷の坂本繁二郎さんに惚れこんでいて、師事されていたものと思えます。青山熊治さんは、帝展の審査員をやられた方です。萬鉄五郎さんは岩手出身。34歳のときに療養で茅ヶ崎に来ていて、早くに亡くなられました。原精一さんは、展覧会で萬さんの作品を見て、弟子になったそうです。萬さんの美術学校の卒業制作は裸体の女子像で、国の重要文化財として国立近代美術館に所蔵されています。

そういう凄人たちを、若手が呼んで実現した。すごく盛り上がったようです。第3回からは横田七郎さんが参加。第6回には日本画の溝上(小倉)遊亀さんが鎌倉から参加しました。この方は、その後、日本美術院の理事長も務め、女流としては2人目の文化勲章を受勲されています。

だんだん戦争が進み、召集されたり、離れていく人がいて、昭和19年頃には、一時的な休会もありました。戦争末期、安田鞞彦(ゆきひこ)さんという、日本画の大家が大磯に越して来られた。この方を慕って、上垣侯鳥さん、森田暁平さんなど、その後の西相展に関係する方たちも越してこられた。

■文化を担う人々の覚悟 — 灯火管制下の絵筆



平成27年で第80回の記念展を迎える「西相美術展」が、10月28日から市民会館で開催された。齊藤四郎先生から西相美術展の歴史を伺った。第一回西相美術展は、もう85年も前の昭和6年(1931年)の開催である。会場は平塚家政女学校だったそう。特別陳列として、萬鉄五郎や坂本繁二郎などが出品してくれて、大いに盛り上がったそうである。それが、80回も続いていくきっかけとなったと云う。戦争中は、美術の世界も否応なしに芸術文化が抑圧される時代となつて、西相美術展も中断を余儀なくされた。それでも灯火管制下で、仲間が集まって作品を描いていたと云う話に驚いた。見つかれば処罰は間違いない時代に、それでも絵を描きたいと云

森田暁平さんは、小田原で、白山中学の先生になり、絵画部の顧問もやってくれて、私も指導を受けました。生徒をモデルに描くんですが、先生が一本の線でずーっと、惚れ惚れするような線を描いて、凄いなあと思いました。終戦後は、よく皆で「自宅へ遊びに行き、奥さんが作った野菜をスケッチしました。上垣侯鳥さんは、市展の審査員を務められ、市展の50回記念誌に「私が小田原に来て、はじめて市展の展示作品を見たとき、他の作品を模写したものだとか、これで日本画と言うのか、というものばかりだった」と書かれています。小田原で日本画をやりたい人たちは、このお二人に教わりました。今の西相美術の日本画の方々にも、上垣さんのお弟子さんがおられます。おかげで、小田原の日本画のレベルがぐっと上がった、という歴史がありました。

様々なグループの中でも、戦中派といわれる人たちがいて、8月15日の終戦から16日後、9月1日に展覧会を開いています。「小田原美術会」の石井佐一さん、門松茂夫さん、杉崎稔さんたちです。戦時中、絵の具もキャンバスもない時代、絵など描いていると非国民と言われるので、隠れて描いていた。それでも、描くのが好きで、描きたいん

う心を抑えることができなかったのだから。絵を描くことすら覚悟の要る時代だった。

昭和20年、「待つてました！」とばかりに、すぐに市内で展覧会が開催されたそう。終戦直後の食料もままならない時勢にもかかわらず、展覧会を開催した西相美術展のメンバーの心には、自由に絵を描ける喜びが溢れていたことだろう。

昭和27年に中央公民館が完成すると、それが西相美術展の会場になったが、公民館は展示場でないため、展示パネルはみんなで作りました。展示幕は、「平井書店」や「うしろろ」から寄付を受けたそう。地元企業が、美術展を支えたのである。西相美術展は、まさしく地元とともに80回の歴史を重ねてきたと云えるだろう。

(ライブラリー隊員・ふかちゃん)

です。週に一度、十五夜茶屋というところで作品を持ち寄り、戦争中の灯火管制の下、研究会を開いていたそうです。終戦になって、「よし、やろう！」と。ちょうど9月1日は、小田原にアメリカの進駐軍が来た日、展覧会の最中に、街中を歩いていた女性が、進駐軍が怖くて会場に飛び込んで来たこともあったそうです。日本で戦後はじまった展覧会のさきがけだったと思います。そのくらい、描きたい、発表したい、という気持ちがありました。それが、今の西相展でも続いています。

第1回の会場は平塚でした。当時のグループは小田原の人だけではなく、藤沢や平塚、大磯、二宮の人がいて、一番集まりやすい平塚でやりました。先ほどの特別陳列もこの会場です。2回目からはずっと小田原ですが、当時は国民学校とっていた、城内小学校・本町小学校の講堂を使っていました。講堂なので展示施設もなく、自分たちで材木やペニヤを買ってきて、幕をかけて、大八車で運んできて設置したそうです。

初期の市展も同じで、横田七郎さんは「何よりも会場に苦労しました。いまのように毎年、決まった場所がありませんので、その年ごとに会場を探さねばならず、調整に苦労しました。(中略)パネルを始め、展示用の設備は一切ありませんでした。みんなで角材や板をパネルに作りました。よい思い出です」と語っています。5回展のときに、街の有志がお金を出して、幕を作ってくれたそうです。今でも名簿が残っていますが、会員一同感激したそうです。

中央公民館が昭和27年にでき、このときから市展と西相展が、春と秋に別々に使っていくことになりました。

定まった展示場がないので市の体育館や、今は銅門広場になっている城内高校の体育館を会場にしたり、一時は「窓梅会館」という、今はお休み処になっているあたりの施設も使いました。

市民会館の本館完成が昭和40年です。展示室だけでは足りず、毎回小ホールに50枚から60枚のパネルを大変な思いで組み立てて展示場になっています。それでも足りない分を

第67回 小田原市 市展 2014

前期	洋画・日本画・版画・彫塑	後期	工芸・書道・写真
5月21日(水)~5月25日(日)		6月4日(水)~6月8日(日)	
入場:5:17時~14:00-17:00		入場:5:31時~14:00-17:00	
会場] 小田原市生涯学習センターけやき			
時間] 10:00~18:00 (休館日:6月16日(祝))			

毎年、5月・6月に行われる「小田原市美術展覧会(市展)」のポスターも、齊藤四郎さんのデザイン

生涯学習センターけやきからパネルを借りて、トラックで運んでいます。早く新しい芸術文化創造センターが完成してほしいと思っていますが、悩みがどこまで解消するか、気になっています。いかに展示スペースを確保するか、ということが、これらの検討だと思えます。

小田原には美術館がないので、収蔵場所がありません。個人個人では、記念作品や受賞作、代表作は残しているようですが、置き場所がなくなってしまう。私もプレハブを作つて、木枠から外して絵だけを保管しています。キャンバスに張つたままだと置き場所が足りなくなってしまう。収蔵をしても保管が大変です。外国の美術館ではきちんとクリーニングしたり、修復したりして、展覧会をしても昨日描いたかというほど綺麗です。収蔵庫を作った場合、保管のほうに気がなりません。

初期の創立者は、みんな凄いですよね。こういうものはきちんと記録に残しておかないといけない。それに、この頃はみんな若い人たちがやっていたんです。今は毎日絵を描くような若者が少なくなりました。昔は教える先生たちがいました。井上三綱さんも、柏木さんも、石井さんも、上垣さんも絵画教室の先生でした。そういう先生がいて、いまの西相美術協会でも、師弟関係が孫、ひ孫の代まで繋がっています。

小田原城の薪能は、日本屈指の名舞台でした 中津川悦子さん（小田原謡曲連合会副会長）

大正から昭和にかけて謡曲をはじめ、東京の観世流の先生に師事して「謡（うたい）」を小田原に持ってきたのが祖父・中津川吉蔵です。昭和9年に師範を取得して、披露の会を箱根湯本の福住楼の宴会場で行いました。その時の番組や、芳名帳も、記録が和綴じでぜんぶ残っておりま。小田原の銀座通りの方々、江嶋さん、福田屋さん、佐々木旅館さん、松坂屋さん、五十嵐写真館の二代目、登さんもおられて、すごい面々のお名前がありました。また、長唄の杵屋響泉さんのお名前もありましたね。

祖父は、湯本の「三味荘」や底倉の「つたや」などに出稽古に行っていました。年に2回、夏と冬に謡曲の愛好家の発表会があり、お風呂に入りながらお稽古をしたり、佳き時代、優雅な時代だったと思います。謡曲を習う方はすぐ芸達者で、発表会のあと、みんな宮小路にいってしま。二人羽織したり、宴会なんか盛り上がり大変。粋な時代だったんでしょうね。

「静山荘」というお屋敷に稽古舞台があり、東京から先生をお呼びしてお稽古をしていました。私も子どもながら、一緒に教えていただきました。私は5歳から祖父について謡いを習い、なんとなく祖父の跡を継いでいくのかと思っておりました。高校を出て、東京の家元直系の職分の先生に、内弟子として入らせていただきました。観世流職分家の嶋沢啓

次師に内弟子入門、その後観世元昭（家元の弟）に師事いたしました。元昭師には小田原城薪能には大変ご尽力いただきました。

能、謡曲は男社会で、女性も嗜みとして習う方はおりましたが、内弟子としては私だけ、女ひとり。先生方も扱いが困って、「通い」の弟子になりました。あの頃は新幹線もなく、朝五時ごろの電車に乗って、帰りは最後の電車でした。内弟子は、子どものお守りからお掃除まで、みんなやります。玄關の玉砂利ひとつひとつお掃除したり。お宅は目黒の雅叙園の近くでしたが、雅叙園は私にとってお守りの庭でした。

その先生の、私が一番最初に内弟子で通ったお稽古場がすごかったんです。子ども心に、お弟子さんたちが稽古にいらっしやるととき、「いらっしやいませ」とお迎えするんですが、お名前とお顔を覚えるのがまず大変でした。何十人もいますから。その中に、齊藤輝子さん、齊藤茂吉の奥様で北杜夫のお母さんもういらして、すごく可愛がってもらいました。柳屋ポマードのご夫妻とか、味の素さん、東急さんなど、皆さん錚々たるメンバーの方が見えていました。

私も22歳のときに独立しまして、祖父のお弟子さんたちを教えながら、ということでお免状をいただきました。小田原で今に至っています。

お能の世界は、100%男社会でした。今は東京藝大にも学科があり、ずいぶん増えてきましたけれども、やはり、本舞台に出て活躍できるのは、お家が昔から続く格式の男の人に限られてしま。なかなか舞台では活動できないのです。私ももうちよつとしつかりやっておけば、と思っています。今の時代だったらきつと、もつとできたと思うんです。小田原で普及させながら、小田原で習いたいという方に、小田原の謡曲界をみんなと一緒にやっていった方がいいんじゃないかな、と思いました。

小田原謡曲連合会は、昭和33年発足で、最盛期は25団体、1000人くらいの会員さんがおりました。今は、9団体で200人くら

歴史の息づく街で 「謡曲」との歳月を伺う



ワークショップ2日目のゲストは小田原謡曲連合会副会長の中津川悦子さん。小田原商店街の旦那衆のたしなみとして多くの芸事があったが、中津川家では悦子さんのお祖父様が謡曲をなさっておられ、のちには家元について観世流を本格的に学び、地域に広めた方でもあったとのこと。

現在小田原には9団体が集う小田原謡曲連合会がある。連合会は、昭和35年（1960）年の市民文化祭に第1回大会を開催したのを機に翌年発会。以来、各団体の活動はもとより、大会の開催や、昭和58年〜平成21年まで開催された小田原薪能の実行に尽力された。平成25年より、「能の体験教室」も開催し、裾野の拡大にも努めている。「和」の体験は他会館で

らいです。歴代の会長さんには、お茶屋の江嶋さんの江嶋平八さん、その後は教育長だった譲原嘉市さん。3代目は椎野泰さん。4代目がいまの杉崎稔会長です。92歳で、車も運転して、がんばっています。謡いを続けてますと、長生きをして、健康になります。

今でも、若い方は何人かおられます。どこかで興味を持たないと、稽古も続かないですね。本来ですと、私達も謡曲の内容を詳しく理解し、易しく導いて行きたいのですが、どうしても発声・節・型から入ってしまう、指導の方法も難しいですね。謡本の内容は、一行かざして名所・旧跡を知り、習わずして古事・和歌を識る。」という様に、奥深く楽しいものです。

最近では、謡曲連合会で、お能のワークショップをやっています。もつと興味を持ってもらいたいと、市民会館の和室（第五会議室）で、50人から60人くらいの方に、衣裳を着たり脱いだり、能で使うものや、解説や、体験をしています。今年もやる予定で、少しづつでも普及させたいですね。親子を対象にしているんですが、参加したい方はどなたでも受け容れています。出席して体験した方は、とてもよかったです、と帰られます。とて

も好評なので注目したい。文化連盟でお会いすることの多い、いつもきりつとして素敵なお中津川先生ですが、ゆつくりお話を伺う事もなかったので、今回のワークショップは貴重な機会となりました。当時芸を修めるには、住み込みで修業しなければならなかったとのことで、悦子さんも、ご家族も覚悟が無ければできなかったのではと敬服しました。

能は日常生活では触れる機会も少ないですが、歴史ある都市として、小田原が、謡曲の次代への継承と裾野の拡大に取り組むことは重要ではないかと感じました。平成27年に16年ぶりに小田原で開催された松竹大歌舞伎では、本公演前に見どころの紹介や解説などの「プレセミナー」がありました。能もそういうのがあるといいのかしらと思えました。

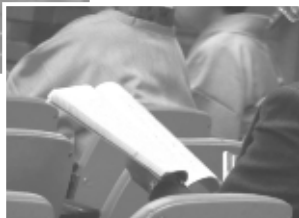
（ライブラリー隊員・じんま）

も嬉しいですが、本来はそれを持っていていかんきやいけないんです。私達は自分たちが演じて、生徒さんには発表会に間に合うように教えてあげるのが精一杯で、ワークショップのような企画をするマネジメントの方がいてくださると、とても嬉しいなと思うことがあります。



▲第62回謡曲大会の様子
（生涯学習センターけやき）

謡本を手にするお客様▶



「新能」とは何か ―成り立ちと意義―



金春信高…能楽金春流第79世家元は、著書『新能 序―破―急―幻』(グラフィック社・1984)の冒頭で以下の様に述べています。

「能は、新能において大衆のものとなった。江戸時代の新能は、奈良の地においてのみ行われていた。奈良の興福寺と春日神社の御神事能なのである。戦後、日本各地で行われている今日の新能は、奈良新能から見れば、イミテーションともいえるべき新能が、大変なブームを巻き起こしているのである。新能を通して、一般大衆が、能芸術の真髄を正しく理解した。それにも拘らず、能楽関係者の中には、能はやはり能楽堂で見るべきだと言いつつも、能は素晴らしい。能を能楽堂にのみ閉じ込めることなく、能の多面性を探り、新しい能の魅力を開掘することも能芸術にとって大切なことではなかるか。(抜粋)―この言葉が、新能の位置づけを象徴しているといえるのではないだろうか。

『能・狂言を学ぶ人のために』(世界思想社・2012・林和利編)によれば、8世紀に日本に渡来した唐散楽に始まり、能の源流といわれる猿楽が、翁猿楽として記録に残るのは1283年5月に春日若宮臨時祭にて行われたものが最初の様です。能舞台の形式が定まってきたのは、その後3世紀の時を経て、安土桃山時代となる様です。この本の中で新能についての記載は、奈良の興福寺での薪猿楽として述べられた後は、「昭和50年代のバブル経済期に、華やかなものを好む気風の中、各地で新能としての上演が急増した。」とあります。

また、『新能入門』(婦人画報社・1994)の帯では、「中世以降に確立された能の世界で、新能はさらにそれより古く、平安中期にはすでに原初の形で始まっていたとされています。自然を舞台とする野外劇ともいえるべき新能」と説明されています。小田原城新能は、全国で定期的に行われている新能としてこの本の中で取り上げられています。

(ライブラリー隊員・S.K.)

「小田原城新能」は、平成21年まで27年間、27回続きました。私は第1回から関わらせていただきました。その頃、観世流の中森晶三さんが、鎌倉をはじめあちこちの新能を手がけていらして、小田原でもやろうと、当時の譲原会長がお声掛けしました。

第2回目からは、小田原謡曲連合会に昔からご指導いただいております、観世流の観世元昭師と、観世鏡之丞師にご出演願っております。人間国宝になられた方もおられました。もちろん私共連合会は、チケット販売、舞台設営など、大変協力いたしましたよ。

27回のうち、半分までは行かないけれど、雨に降られました。開催時期の9月ごろは一番晴れる確立の高い日を選んだのですが、第1回から雨でした。

雨の日は、市民会館大ホールの舞台で公演しました。当時の市民会館の舞台スタッフさんや、新能スタッフのシャム猫カンパニーさんとか、雨が降ると野外と会館の両方をご用意いただいて、すごく協力いただきました。空を見ながら、ポツンポツンと来ると、「ダメだ、こっち！」なんてね。雨だけは、どうにもならないですね。

▼小田原城新能 第27回パンフレット

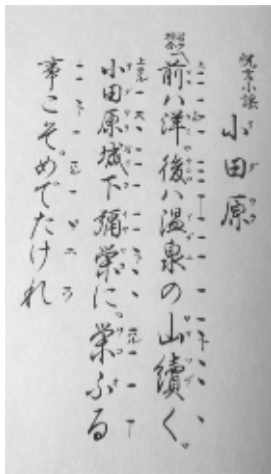


▲小田原城新能 第1回パンフレット



小田原城の城址公園で野外上演するのは、とても賑やかです。動物の鳴声が入ったり、灯がついたり。ちょうど仲秋の名月で、ロケーションとしては最高です。国内では、姫路城や大阪城などでもやっていますが、小田原城

が絶対すばらしいと思います。能は本来、舞台の後ろに松羽目(まつばめ)といって松を描いた板があるんですが、お城の本物の松を松羽目板に見立てて、舞台を作ってくださいました。最初は平地だったんですが、だんだん、手をかけながら客席を階段にしていったりしました。2回ほど、銅門でも公演しました。銅門が復元された時に、完成した門を背景にして。



祝言小謡「小田原」

平成3年、小田原市制50周年の記念公演に『北条』を上演しました。新能20回記念公演でも再演いたしました。当時、図書館長だった石井富之助さんが調査なさって、豊臣秀吉の功績を題材にした『大閣五番能』の中に、小田原北条攻めを描いた『北条』があるかと教えてくださり、「能の舞台にしたらどうか」ということで、観世元昭師にお願いで、複曲という形で作って頂きました。NHKでも放送されました。

当時の小田原城主・四代氏政が切腹して果てますね。物語は、旅の僧が小田原に来て、氏政の亡霊と語り、やがて成仏するという内容です。滅ぼされた側のお話ですが、滅ぼされて終わりではなくて、成仏はするけれども、最後は小田原を称えておこう、ということとで、作詞した方が新たに「祝言謡い」を添えてくださったんです。小田原での公演の際は、この祝言謡いを最後に謡うと、締まるんですよ。これは小田原にしかない祝言謡いです。『北条』で使用した、「氏政」「秀吉」の創作面が、小田原城天守閣に展示されています。

観光事業としての興行がだんだん苦しくなり、いまは中止になっています。ぜひ芸術文化創造センター建設を機に、復活してほしいなと思います。小田原で発展してきた謡曲の

賑わいが、城下町・小田原で先細りになってほしくないの、いまのうちに何が伝えられるか、勉強していかなければならないと思います。

かつては小田原市民会館にも「運営委員会」があり、私も運営に参加をさせていただきました。会館の予算と、自主事業の検討が主でした。ふるさと文化基金の利息などを活用して、買い公演の事業が4本から8本くらいできました。小田原市事業協会から提案される企画をどれにしようか、とみんなで決めていました。ピアニストの中村絃子さん、ヴァイオリン前橋汀子さん、千住真理子さんも来ていただきました。ウイーン少年合唱団も何度もお呼びしました。こう見ていると、非常に知名度の高い方に来ていただきましたね。

この当時から、委員会では新しい市民会館を建てなくて、という話はしていました。毎年、修繕費がものすごくかかり、平成4年の大ホール修理もかなりの費用がかかっていました。平成元年には、「市民会館検討委員会」を立ち上げてください。その1、2年後に、20人くらいのメンバーで検討委員会が立ち上がりました。でも、小田原市民会館も頑張ってください。市民会館は、なんとなく落ち着きますよ。平成4年に、能『羽衣』を舞った、思い出の大ホールです。

おだわらライブラリー通信 第四号

- 発行 小田原市 文化政策課
- 平成27年度文化創造活動担い手育成事業「文化資源発掘ワークショップ」報告書
- 編集 富士原 直也
- 資料提供 神馬純江さん(ライブラリー隊員)
- 印刷 平成28年3月吉日
- 問合せ 0465-33-1709
〒250-8555 小田原市荻窪300番地
文化政策課 芸術文化創造係
電話 0465-33-1706 / FAX 0465-33-1526